
ALICE

勘兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A L I C E

【Nコード】

N 9 2 8 3 C

【作者名】

勘兵衛

【あらすじ】

廃れた街の一画。男は銃を懐に隠し、目の前にいる少女の言葉に耳を傾ける。「おじちゃん……あたしのこと、買って?」「少女と殺し屋が織り成す切ない物語。

第一話（前書き）

当作品には、作品上での暴力的表現が見られますので閲覧には注意してください。

第一話

目障りだった。

硝煙の匂いと、撃ったときの圧迫感だけがあればいいと思っていたから。

「おじちゃん……あたしのこと、買って？」

目障りだった。

そういう声も、実は震えている手も、どう見ても年端の行かぬ外見も。

胸糞悪い。どうして俺の元に来た。

「お金、欲しいの」

涙を溜められても俺にはどうすることもできない。
当然金を出す気はなかった。ならばどうするか。

「ねえ。お願い」

縋るような目。見覚えがあるような気がして、頭痛がした。
俺は懐の銃に手を当てる眉根を寄せる。少女のやっている商売は、
この街ではごく一般的だ。

無法地帯となっていているわけではないが警察も官僚も、花街へと足を
運んでいるため、何も変わらない。

「寝てる間にお金なんか取らないから」

「馬鹿が……」

小さく罵ったのは、少女に対してか、自分に対してか、はたまた
誰かに対してか。

当然親という存在などないであろう少女は澄んだ蒼い目で俺を見
上げてくる。

その先の行為の意味を分かっているのか。

「下世話な質問だが」

俺はできるだけ声のトーンを上げてみた。

子ども相手は慣れていない。尤も、この少女を子どもと形容して
いいものか。

「今までに客を呼んだことは？」

「……おじちゃんが初めて」

ひそめた眉根を揉みだいで、髪をかき上げる。

この感覚には覚えがある。慨視感に囚われたように記憶を辿る俺がいた。

そう、この少女は確かに。

「どうしたの？」

「いや……」

確かに、似ていた。

だが所詮それはその慨視感でしかなく、動揺と苛つきが同時に襲ってくる。

裏道に入っているとはいえ、道路の中央でこのような会話を見られたりすれば、それこそ命に関わる。

この仕事はそういうものだ。

ふと見ると、少女の手は依然震えている。そうだ。震えている方が、正しい。

俺の銃は、正しい答えなんざ教えてはくれないが。

「お前の雇い主は？」

そこまで問答して、俺の口は勝手に動いていた。

雇い主と会ってどうするつもりだと自問してみたが、銃と同じで俺の頭は答えなど導かない。

「カツラギの……」

「ああ、花街外れか」

花街の遊郭通りにも、外れというのは存在する。まさにこの曇り空と同じ空気の郭。

はぐれ者共が集う場所だ。実際、足を運んだことはないが髪も伸ばし放題の俺はそのはぐれ者共と同じ人間に見えたんだろう。

この、少女になら特に。

「連れて行け」

少女は、首をかしげた。黒い髪が同時に揺れて、その途端に雨が降る。

ああ。

胸糞悪い。

第一話（後書き）

何を想い、どこへ向かい、どんな結末に達するのか。
それは彼らだけが知っているのでしょう。
読んでくださってありがとうございます。

第二話

目障りだった。

硝煙の匂いと、撃ったときの圧迫感だけがあればいいと思っ
たから。

「おじちゃん……あたしのこと、買って？」

目障りだった。

そういう声も、実は震えている手も、どう見ても年端の行かぬ外
見も。

胸糞悪い。どうして俺の元に来た。

「お金、欲しいの」

涙を溜められても俺にはどうすることもできない。
当然金を出す気はなかった。ならばどうするか。

「ねえ。お願い」

縋るような目。見覚えがあるような気がして、頭痛がした。
俺は懐の銃に手を当てて眉根を寄せる。少女のやっている商売は、
この街ではごく一般的だ。

無法地帯となっていているわけではないが警察も官僚も、花街へと足を
運んでいるため、何も変わらない。

「寝てる間にお金なんか取らないから」

「馬鹿が……」

小さく罵ったのは、少女に対してか、自分に対してか、はたまた
誰かに対してか。

当然親という存在などないであろう少女は澄んだ蒼い目で俺を見
上げてくる。

その先の行為の意味を分かっているのか。

「下世話な質問だが」

俺はできるだけ声のトーンを上げてみた。

子ども相手は慣れていない。尤も、この少女を子どもと形容して
いいものか。

「今までに客を呼んだことは？」

「……おじちゃんか初めて」

ひそめた眉根を揉みだいで、髪をかき上げる。

この感覚には覚えがある。慨視感に囚われたように記憶を辿る俺がいた。

そう、この少女は確かに。

「どうしたの？」

「いや……」

確かに、似ていた。

だが所詮それはその慨視感でしかなく、動揺と苛つきが同時に襲ってくる。

裏道に入っているとはいえ、道路の中央でこのような会話を見られたりすれば、それこそ命に関わる。

この仕事はそういうものだ。

ふと見ると、少女の手は依然震えている。そうだ。震えている方が、正しい。

俺の銃は、正しい答えなんざ教えてはくれないが。

「お前の雇い主は？」

そこまで問答して、俺の口は勝手に動いていた。

雇い主と会ってどうするつもりだと自問してみたが、銃と同じで俺の頭は答えなど導かない。

「カツラギの……」

「ああ、花街外れか」

花街の遊郭通りにも、外れというのは存在する。まさにこの曇り空と同じ空気の郭。

はぐれ者共が集う場所だ。実際、足を運んだことはないが髪も伸ばし放題の俺はそのはぐれ者共と同じ人間に見えたんだろう。

この、少女になら特に。

「連れて行け」

少女は、首をかしげた。黒い髪が同時に揺れて、その途端に雨が降る。

ああ。

胸糞悪い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9283c/>

ALICE

2010年10月17日16時44分発行